

# オリンピックを「めくる」冒険

— 日本体育大学オリンピックスポーツ文化研究所の活動について —

## 富田幸祐

### 1. はじめに

これまで日本体育大学ではオリンピック競技大会に数多くの選手を派遣し、オリンピックで金メダル39個、銀メダル45個、銅メダル47個、パラリンピックで銀メダル1個、銅メダル1個を獲得してきた。こうした日本スポーツ界に対する競技力への貢献だけでなく、学術的な貢献を企図して、2015年に日本体育大学オリンピックスポーツ文化研究所は開所となった。

研究所の主な活動内容は、研究誌『オリンピックスポーツ文化研究』の発刊（年1回）と研究プロジェクトの推進である。その他、本学教員や学外から講師を招聘し、「スポーツの祭典の継承」と題したセミナーを2018年より開催している。本稿では研究所の活動について報告する。

### 2. オリンピックスポーツ文化研究所における史料収集と整理

現在オリンピックスポーツ文化研究所には五つの史料群がある。全容が把握できていないものもあるがそれぞれの概要を以下に記す。

#### 2-1. 猪谷千春文庫

猪谷千春文庫は元国際オリンピック委員会（IOC）副会長の猪谷千春氏から寄贈を受けた史料群のことを指し、研究所の所蔵史料の中では最も所蔵量が多い。史料は猪谷氏が1982年にIOC委員となって以降のIOC総会や理事会、小委員会での配布資料やその議事録、各大会の記念品や映像資料など多岐にわたっている。特記すべきは招致活動関連の史料である。猪谷氏が、IOCの開催立候補都市の評価委員会のメンバーであったため、開催した都市だけでなく立候補した各都市から提供された

資料や記念品が豊富に残されている<sup>1)</sup>。

#### 2-2. 成瀬郁夫コレクション

成瀬郁夫氏は、本学の第一体育館など、約2,000か所の体育館や武道場の床作りを行った会社を営んでいる。その成瀬氏よりオリンピック関連品を中心に寄贈を受けた。1964年東京オリンピックのポスターや、1964年東京オリンピックに出場し、日本人で初めて体操の個人総合優勝を果たした遠藤幸雄や1984年ロサンゼルスオリンピックで金2個（個人総合・つり輪）、銀1個（跳馬）、銅2個（鉄棒、団体総合）の五つのメダルを獲得した本学学長である具志堅幸司氏のユニフォームなどを所蔵している。

#### 2-3. NSSU アスリートコレクション

このコレクションは、本学出身アスリートから寄贈されたオリンピックのレプリカメダルやオリンピックなどの国際競技大会で使用された制服やユニフォームによって構成されている。所蔵品の中には本学学長である具志堅幸司氏の1984年ロサンゼルスオリンピックの金メダル（レプリカ）や、1964年東京オリンピックの体操日本代表選手で本学名誉教授である監物永三氏の国際競技大会で着用した制服などがある<sup>2)</sup>。

#### 2-4. 伊原義文コレクション

伊原義文氏は1998年に開催された長野パラリンピックで組織委員会の事務局次長を務めた人物である。伊原氏に対し長野パラリンピックに関するインタビューを行った際に関連史料の寄贈を受けた。このコレクションは議事録のような文字史料は数が少なく、長野パラリンピックのポスターや

記念品、グッズを中心にした史料群となっている。

## 2-5. 松澤一鶴フォトコレクション

松澤一鶴(1900~1965)は1932年ロサンゼルスオリンピックと1936年ベルリンオリンピックの水泳日本代表監督であり、戦後は日本水泳連盟の役員や1964年東京オリンピックの大会組織委員会役員などを歴任した人物である。その松澤が新聞社や関係者からもらったものや本人が撮影したと考えられる写真とネガによってこの史料群は構成されている。すべてがアルバム等で整理されているわけではないが、いつどこで撮影されたものであるかが記載されているものもあり、文字史料では追えない当該期のスポーツの瞬間を捉える貴重な史料群である。

現在、これら五つの史料群について一般利用、公開に向けた作業を日本体育大学図書館の協力を得て行っている。これらの史料群の目録や解題は完成次第、本研究所HPや『オリンピックスポーツ文化研究』に掲載予定である。



▲写真1. 整理作業中の猪谷千春文庫

## 3. 日本におけるオリンピック・パラリンピックの招致に関する調査・研究

これまで日本の都市はオリンピックの開催権を夏季大会が3回(1940年東京, 1964年東京, 2020年東京), 冬季大会が2回(1972年札幌, 1998年長野)獲得してきた。しかし日本の都市によるオリンピック招致はこの5回だけではない。東京は1960年大会と2016年大会でも招致を行い、札幌も1966年大会, 1984年大会, そして現在2030年大会の招致に向け検討がなされている。この他にも、IOCに立候補申請を行った都市でいえば1988年大会を目指した名古屋と2008年大会を目指した大阪が挙げら

れる<sup>3)</sup>。研究所では、第10回冬季オリンピック競技大会(1968)の札幌招致と第24回夏季オリンピック競技大会(1988)の名古屋招致について調査・研究を行っている。

「札幌オリンピック」と聞くと1972年札幌オリンピックが真っ先に思い浮かぶと思われる。そんな札幌は実は1968年大会にも立候補をしており、グルノーブルに敗れていた。つまり、この1968年大会落選を糧として再度挑み、招致成功となったのが1972年大会であった。これらを踏まえ、札幌の1968年大会招致ではいかなる招致活動が行われていたのか。また1968年大会招致は1972年大会招致にどのような影響を与えたのかについて史資料の収集と調査・研究を行っている。

1964年東京オリンピックの次に日本で開催されたのは1972年の冬季大会である札幌オリンピックであったが、夏季大会として東京の次に開催をめぐしたのは名古屋であった。1988年大会には名古屋の他にメルボルンとソウルが立候補し、メルボルンを最大のライバルと想定していた名古屋は、メルボルンの立候補辞退を受けて、招致成功を確実視していた。しかし1988年大会の開催権を獲得したのはソウルであった。そこにはソウルによる強烈なロビー活動があったとされている。また名古屋の1988年大会招致については住民による招致反対運動がいまも語り継がれている。しかしそもそもなぜ名古屋はオリンピックを招致しようとしたのか。そして名古屋のオリンピック構想とはどのようなものであったのか。その点がこれまで詳らかとなっていない。そこで、1988年大会名古屋招致に関する基礎的検討を行うべく史資料の収集と調査・研究を行っている。

こうした招致活動に関する史資料は図書館や公文書館に所蔵されている。札幌の1968年大会招致については北海道立図書館、札幌市中央図書館、北海道立公文書館が、名古屋の1988年大会招致については、愛知県図書館、名古屋市鶴舞中央図書館、名古屋市政資料館が主な調査先となっている。

次に本誌テーマである「図書館とオリンピック」に合わせてこの調査途上で見つけたある資料について紹介したい。

## 4. 『札幌オリンピック冬季大会資料目録』

1972年札幌大会に関する資料目録がある。それ

が北海道立図書館によって編集された『札幌オリンピック冬季大会資料目録』（以下『札幌大会資料目録』）である。目録には780に近い資料が、「1. 招致活動, 2. 大会を迎えるために, 3. 大会, 4. 大会を終えて, 5. 視聴覚資料」の五つに分類されて掲載されている。同書によると北海道立図書館では、1968年大会の招致開始から、1972年大会が終わり組織委員会の業務の終了した1974年1月末までの期間、資料収集を行い、目録作成をしたという。序には当時の北海道立図書館長である阿部悟郎の署名で次の様に書かれている<sup>4)</sup>。

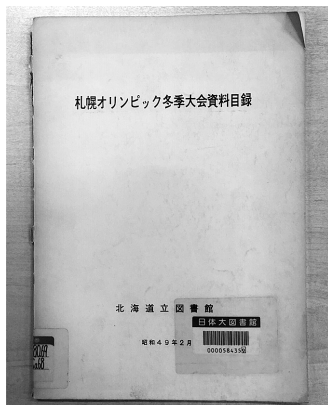
この大会のため多数の人達が参加し、膨大な経費・時間を費やし、多くの関連施設がつくられました。そして、たくさんの貴重な資料が残されました。

道民のための図書館として、これら資料を収集・保存することが本館の責務と考え、招致決定以来、収集に努め、この目録を作成しました。

収集対象は「①大会の資料、②大会内容を含む資料、③大会マークが使用された資料で特に印刷された資料<sup>5)</sup>」と定め図書館資料の範囲外と考えられる使用機材やユニフォーム、聖火トーチ、表彰メダルは対象外である。またその他にも、札幌大会に関する新聞切り抜きが2,780余点、大会開催年度の59の道内紙と94の道外紙、合わせて153種もの新聞の収集が行われた（目録未掲載）。

『札幌大会資料目録』に目を通すと収集の範囲が1972年大会に関連するものだけでなく1968年大会の招致活動やその前後に開催された関連大会（ブレ・オリンピックやオリンピック記念国際スポーツ大会）に関するもの、

そして日本語図書だけでなく欧文図書（英文や仏文など）にも及んでいる。また文献資料だけでなく記念品も数多く収集していたことがうかがえる。この目録は北海道立図書館が地域とオリンピックの関



▲写真2.『札幌オリンピック冬季大会資料目録』（日体大図書館所蔵）

わりを遺す試みとして行ったものとして考えられる。公共図書館におけるこうした試みは珍しいのではないだろうか。管見の限り、この『札幌大会資料目録』以外には、東京都江東区立城東図書館による『オリンピックに関する図書目録』（1964年7月出版）が出てくるにとどまる<sup>6)</sup>。

## 5. おわりに

日本ではこれまで東京、札幌、長野でオリンピックが開催され、私たちの記憶を頼りに語られる日本でのオリンピックはこの3都市に集約されてきた。しかし調査から見えてくるのは、それ以外の都市に残るオリンピックの痕跡である。オリンピックとなんらかの関わりがあると思われる全国各地の図書館の所蔵を調べると、オリンピックの一般向け書籍でなく、オリンピック関連史資料が思いのほか残されていることに驚かされる。そして実際に赴き、その史資料を手にとってページをめくると、これまで知り得なかった過去のオリンピックの姿が浮かび上がってくる。

その痕跡を探すために、今後も各地の図書館にてオリンピックを「めくる」冒険を続ける。

## 注

- 1) なお猪谷千春文庫の一部は日本体育大学世田谷キャンパスにて展示を行っている。
- 2) 猪谷千春文庫と同様にNSSUアスリートコレクションの一部も日本体育大学世田谷キャンパスにて展示を行っている。
- 3) この他にも、例えば1998年大会の招致では長野の他に山形、盛岡、旭川が名乗り上げていた。国内選考が行われ、その結果長野がIOCに対し立候補申請をしたという経緯がある。
- 4) 北海道立図書館『札幌オリンピック冬季大会資料目録』1974年2月、p.序。
- 5) 同上、p.2。
- 6) この他に『秩父宮スポーツ図書館蔵書目録』も挙げる事ができるが、スポーツ図書館であり、オリンピックに限定して作られたものではない。もし同様の試みが行われていることをご存じならご教示願いたい。

（とみた こうすけ）

日本体育大学オリンピックスポーツ文化研究所  
 [NDC10：018.097 BSH：1.日本体育大学オリンピック  
 スポーツ文化研究所 2.オリンピックー歴史ー史料]